

熊取町埋蔵文化財調査報告第1集

東円寺跡発掘調査概要・I

1986年 3月

熊取町教育委員会

東円寺跡発掘調査概要報告書・I 正誤表

ページ数 目 次	行数 図 目 次	誤 表 目 次	正
P 7 折り込み図	③淡黄褐色シムト層	③淡黄褐色シルト層	
P 7 折り込み図	④淡灰黄色シムト層	④淡灰黄色シルト層	
P 7 折り込み図	4 m	5 m	
P 9 12行目	市教育委員会	町教育委員会	
P 12 15行目	できなたった	できなかつた	
P 13 第7図	2 km	2 0 0 m	
P 17行目	確 認 で す	確 認 で き ず	
図版 第一	第一トレニチ	第一トレソチ	

は　し　が　き

熊取町には現在周知されている遺跡が23ヶ所あります
が、東円寺跡遺跡と降井家書院に続く屋敷跡を発掘調査
をし、我々の祖先が歩んできた過程が明らかになりつつ
あります。

この遺跡の調査結果、多数の遺構・遺物が確認されま
した。

今回報告する東円寺跡遺跡（平安時代）降井家書院に
続く屋敷跡の調査成果の整理、報告書の作成については
時間的余裕も少なく、概要報告ではありますが提出する
ことができました。

調査の実施から概要の作成まで御協力、御援助いただき
ました関係各位に対して心から感謝の意を表します。

なお、本書が各位の用に役立てば幸甚です。

昭和61年3月

熊取町教育委員会

教育長　原　治　平

例　　言

1. 本書は、熊取町教育委員会が昭和 60 年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当実施した緊急発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は大阪府教育委員会文化財保護課技師 松村隆文、森屋直樹の派遣を受けて、昭和 60 年 4 月 1 日に着手し、昭和 61 年 3 月 31 日に終了した。
3. 調査の実施に当っては土地所有者の他、玉谷哲、坪ノ内徹、田中豊一、井田匡他の諸氏の御協力と御助言を得た。又、第 3 章第 2 節の降井家屋敷跡の遺物の観察については堺市教育委員会技師野田芳正、土山健史氏の御教示を得た。明記して感謝する次第である。
4. 本書における方位は、地図以外は磁北を示し、標高はすべて東京湾平均海水面を基準としている。
5. 本書の執筆は各担当者が分担し、文責を文末に記した。また編集は松村が担当した。

目 次

第 1 章	はじめに	1
第 2 章	地理的・歴史的環境	3
第 3 章	調査の成果	6
第 1 節	東円寺跡 85-1 区の調査	6
第 2 節	降井家屋敷跡 85-1 区の調査	13
第 4 章	まとめ	20

図 版 目 次

図版第一	東円寺跡 遠景・遺構	
図版第二	東円寺跡 遺構	
図版第三	東円寺跡 遺物	
図版第四	降井家屋敷跡 遺構	
図版第五	降井家屋敷跡 遺物	
図版第六	降井家屋敷跡 遺物	
図版第七	降井家屋敷跡 遺物	

挿 図 目 次

第 1 図	熊取町の位置	1
第 2 図	周辺の主な遺跡	4
第 3 図	東円寺跡調査区位置図	6
第 4 図	東円寺跡平面図・断面図	7・8
第 5 図	東円寺跡 SD 01・02 断面図	10
第 6 図	東円寺跡出土遺物	11
第 7 図	降井家屋敷跡調査区位置図	13
第 8 図	降井家屋敷跡トレンチ配置図	13

第 9 図	降井家屋敷跡平面図・断面図	14
第 10 図	降井家屋敷跡出土遺物 (1)	16
第 11 図	降井家屋敷跡出土遺物 (2)	17

図 目 次

第 1 表	調査区一覧表	2
第 2 表	降井家屋敷跡遺物観察表	18

東円寺跡発掘調査概要・I

第1章 はじめに

熊取町における周知の遺跡は、周辺の市町に比べてその数も少なく、また調査自体もそれ程の蓄積をもつとは言えない。ただしこれは埋蔵文化財の稀薄性を意味するのではなく、これまで町域における開発が、相対的に少なかったことに起因すると考えられる。

しかしながら、熊取町でもここ数年のうちに大規模調査が続けて実施されている。大阪府教育委員会による3次にわたる東円寺跡の調査と、財団法人大阪文化財センターが実施した成合寺遺跡の調査がそれで、それぞれ国道170号線と近畿自動車道和歌山線建設に伴うものである。この道路建設はいざれも現在計画が具体化しつつある関西新空港に関連する事業であるが、今後はこれに伴ない民間の大小の開発も進むものと思われる。今後周知の遺跡における正確な範囲の把握と、未知の遺跡の確認が急がれねばならない。

本年度は下記に示すとおり3件の発掘調査を実施した。東円寺跡の2件については從来の調査が遺跡北辺の谷部であったのに對し、遺跡の中心部に近い段丘面が調査対象地である。

また降井家屋敷跡については從来その書院が重要文化財として指定されていたが、今回旧屋敷地の一画と推定される地点で土木工事が計画されたことに伴い発掘調査を実施したものである。結果については第3章に述べる通り屋敷に伴う遺構が検出された。今後周辺を含めて降井家屋敷跡として



第1図 熊取町の位置

開発行為に対処したいと考えている。なお東円寺跡85-2区については年度末に調査を実施したため、報告については機会を改めたい。
（松村）

表1 調査区一覧表

調査地点	申請者	所在地	申請面積(m ²)	担当者
東円寺跡85-1	藤原 勝三	熊取町大字野田2320-2318	1278	松村
降井家屋敷跡85-1	香西 弘光	熊取町大字大久保2-1,2-4	139.58	森屋
東円寺跡85-2	藤原ミサコ	熊取町大字野田2322-1他	2009	井田

第2章 地理的・歴史的環境

熊取町は南北7.8km、東西4.8kmと南北に長い町である。和泉地域の各市町のはほとんどが大阪湾に面しているのに対し、周辺を貝塚・泉佐野両市に囲まれた海をもたない町である。

和泉の基本的な地形は、基盤山地たる和泉山地と、これから派生する丘陵、さらにその縁辺に発達する段丘地形が骨格をなす。沖積地は概して河川沿いに小規模に認められずにすぎず、海岸沿いに浜堤が発達するのも地形的特徴のひとつである。熊取町の地形は南部を山地が占めており、北部は丘陵と段丘地形が大部分を占める。河川は見出川と佐野川（雨山川、住吉川）が北西方向に貫流するが、いずれも流程が8～9kmと短く、流量もさほど多くない。河口をもたないため沖積地は極めて狭少である。

泉南地域の遺跡群の動向については既に何度か述べられているので、ここでは熊取町域の遺跡を中心に簡単に説明しておきたい。

旧石器時代では池ノ谷遺跡が散布地とされているが詳細は不明である。縄文時代については成合寺遺跡で石器、スクレイバー、磨石、台石等が検出されて⁽¹⁾いる。これらはいずれも山地ないしは丘陵に立地する遺跡であるが、同様の立地条件を示す小規模な遺跡は泉南各地に点々と認められ、当該期の遺跡が熊取町域でもさらに増加する可能性がある。

弥生・古墳時代の遺跡では、東円寺跡の調査で弥生時代の石器と土器が、また朝代遺跡から古墳時代後期の須恵器が採集されている。⁽²⁾また五門においては2基の古墳の存在が記録されているが詳細は不明である。当該期の遺跡については、周辺に目を拡げると低位段丘面の縁辺や沖積段丘面に立地し、旧河道に面した遺跡が多い事実が指摘されている。⁽³⁾熊取町では先述した地形条件から大規模な集落の存在は考えにくいが、埋積谷等を利用する小規模な水田経営は充分に想定されてよかろう。

奈良・平安時代については、今回の東円寺跡の調査で7・8世紀の遺構・遺物が検出されており、また東円寺そのものも出土する瓦から平安時代後期の建立と推定されている。段丘面の部分的な開発がこの時期に進んでいた可能性が

強い。

現在認められるような丘陵の一部や段丘面の全面的な耕地化は中・近世を通じて果されたものと推定される。その開発の前提として多くの溜池が築堤されたものと思われるが、今後水利施設と開発の過程が統一的に把握される必要がある。

熊取町における中・近世の調査は埋蔵文化財よりも建造物や金石文の調査が



1. 東円寺跡
2. 関井家屋敷跡
3. 廣田遺跡
4. 地蔵堂遺跡
5. 丸山古墳
6. 稲善寺城跡
7. 王子遺跡
8. 下新出遺跡
9. 千石城跡
10. 濱遠路
11. 橋波羅密寺跡
12. 橋波羅遺跡
13. 中家住宅
14. 久保城跡
15. 大浦中世墓地
16. 五門北古墳
17. 五門古墳
18. 五門遺跡
19. 成合寺遺跡
20. 池ノ谷遺跡
21. 松原遺跡
22. 船岡山遺跡B地点
23. 日根野城跡
24. 長瀬遺跡
25. 振興寺廃寺
26. ダイジー寺跡
27. 三軒家遺跡
28. 諸日遺跡
29. 這池遺跡
30. 朝代遺跡

第2図 周辺の遺跡

進んでいる。近世初頭の建築様式を残す降井家書院や中家住宅はいずれも重要文化財の指定を受けている。文献資料から両家ともに中世後期には、在地小領主の地位を確立しており、熊取荘や周辺の村々を支配していたと推定されるが、この土豪屋敷の実態や周辺の村の成立・構造等の問題に考古学が果たす役割は大きい。また町内には雨山城や久保城、高蔵寺城、山ノ下城等が比定されている。⁽⁵⁾これらの実態の解明も今後の課題である。なお成合寺遺跡では14世紀後半を中心とする600基もの土塙が検出されている。これらは「墓」の可能性をもつとされており、中世の習俗を考える上で貴重な資料である。⁽⁶⁾（松村）

註

- (1) 安里進・大野薫ほか「成合寺」大阪府教育委員会・㈱大阪文化財センター（1985）
- (2) 藤沢真依『東円寺跡発掘調査概要報告書』Ⅰ 大阪府教育委員会（1983）
芝野圭之助『東円寺跡発掘調査概要報告書』Ⅱ 大阪府教育委員会（1984）
- (3) 泉州郷土史研究会編「熊取町の歴史」(1) 熊取町教育委員会（1976）
- (4) 広瀬和雄「遺跡の環境」「男里遺跡発掘調査報告書」Ⅲ 泉南市教育委員会（1985）
- (5) 註(3)文献と同じ
- (6) 註(1)文献と同じ

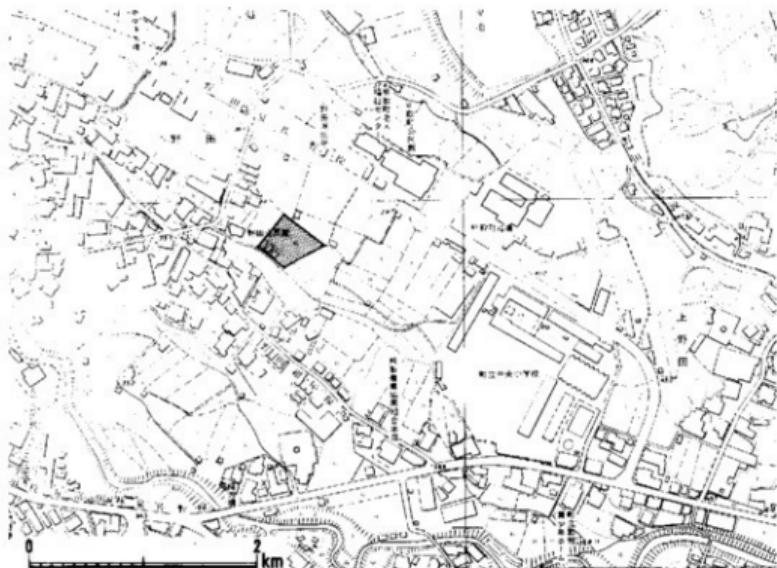
第3章 調査の成果

第1節 東円寺跡 85-1区の調査

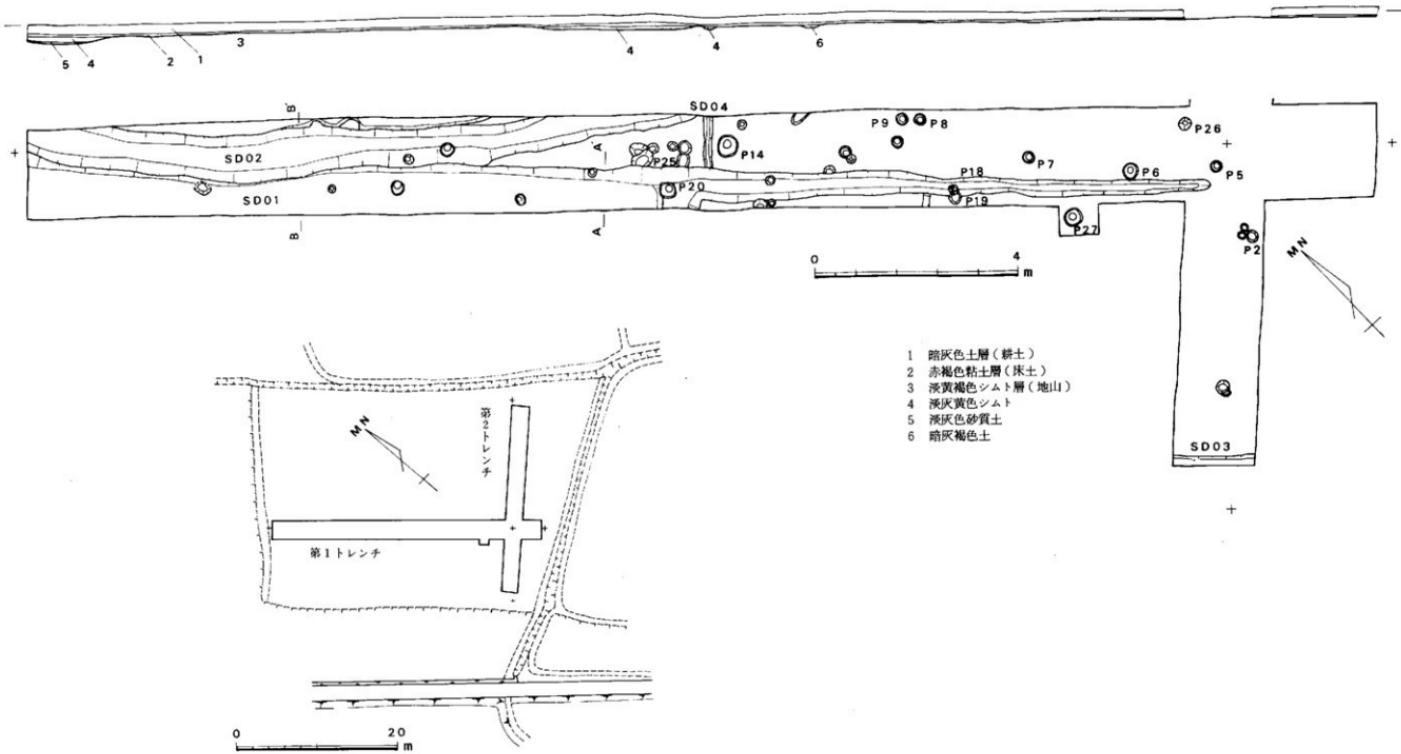
1 位置と既応の調査（第2・3図）

東円寺跡は熊取町の北部、野田の集落の北東部一帯を占める位置にある。地形的には住吉川右岸の洪積段丘中位面に当たり、全体に起伏に富んだ熊取町域では比較的まとまった水田が遺存している地域である。

今少し細かく地形条件をみておくと、この東円寺遺跡をのせる段丘面は、基本的には北から南、東から西への緩やかな傾斜をもつが、等高線を追うことによって遺跡の南と北に、東西方向の西方へ開く2本の開析谷の存在が看取される。現在東円寺遺跡として認識しているのはこの2本の開析谷に挟まれた中位



第3図 東円寺跡調査区位置図



段丘面の張り出し部を中心としている。

東円寺跡については、これまでに府・市両教育委員会によって数ヶ所の調査が実施されている。府教育委員会による調査は遺跡の北辺部、町役場の北側を東西に走る国道170号線建設に伴うもので、1982～1984年にわたり、3次に及ぶ約8800m²の調査が実施されている。地形的には洪積段丘中位面の縁辺と開析谷及び丘陵斜面に該当する。1982年度の調査では2間以上×5間の13世紀後半と推定される掘立柱建物1棟が検出されている。⁽¹⁾また1983年度の調査は開析谷及び中位段丘面縁辺に当り、近世の畠畝跡や水田区画、これに先行する自然流路を利用した溜池遺構や水路等が検出されている。遺物は中世の土器類、中国陶磁器、瓦等が主体であるが、これらに混ってサヌカイト片、弥生土器、⁽²⁾6～8世紀の須恵器等も出土している。

また市教育委員会によって現在の消防署用地及び道路を挟んで南側の駐車場用地の調査が実施されている。この調査ではピットと瓦等が検出されており、⁽³⁾中世を主体とするようである。

以上が既述の調査であるが、現在のところ東円寺そのものと思われる遺構は確認されていない。ただ町立熊取中央小学校の西方には「豊寺」「大門」等の小字名が残り、周辺からは平安時代後期の軒丸瓦等も採集されている。従って小学校の一部を含みその西方一帯がかつての寺院の所在地かと推定される。

今回の調査地点は、小字名で言えば「堂ノ後」・「藤木田」に当り、先述の寺城からは西へはずれる地点ではないかと思われる。⁽⁴⁾地形的には調査地点の南側において急傾斜で高度を下げており、中位段丘面の縁返に該当するものと思われる。

調査は現在の土地地割に従い巾2.5m、長さ33mの北西～西東トレント(第1トレント)とこれに直交する巾2m、長さ23mの北東～南西トレント(第2トレント)を設定した。

2 層序と遺物の包含状態(第4図・図版第3)

調査対象地は現在ほぼ平坦な水田である。層序は単純で、約20cmの暗灰色土層(耕土)と、その下に2～5cmの赤褐色土層(床土)の薄層が存在する。この床土の下は淡黄褐色シルト層でこれが当該地の地山である。後述する溝・

ピット等の遺構はこの淡黄褐色シルト層上面において検出されている。この遺構面のレヴェルは、37.8m前後でほぼ平坦である。

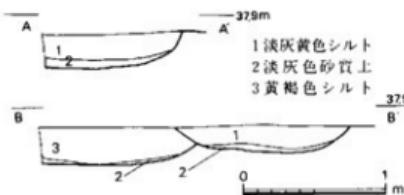
遺物（図版第3、6～8・11・12）は、遺構以外では床土中に中世の瓦器（7・8）、土師器、瓦（12）、小型紡錘形の土錐（11）などと、奈良時代に遡ると推定される須恵器（6）が混在して包含されている。ただし、いずれも細片化しており、量的にもわずかである。このように今回の調査地点では明確な包含層は認められないが、これはおそらく水田の造成の際の削平によるものと推定される。

3 遺構と遺物（第5・6図、図版第1～3）

検出された遺構はピット30数個と数条の溝である。ピットは一辺ないし径が25～60cmと法量に大小が認められるが、法量の大きいものは概して方形に近い平面形を呈し、小さいものは円形を呈するのが一般的である。深さは数cmのものから最も深い例でも30cmを測るにすぎず、かなりの削平を受けていることが窺われる。

ピットからの出土遺物が少なく、また多くが相似た灰褐色土を埋土とする事もあって、個々の厳密な時期の決定は困難であるが、7～8世紀代と推定される須恵器、土師器を含むピットと、瓦器を出土する中世に降る例の両方が認められる。前者をピット番号で示せば19・20・25・26・27などで、後者は2・5・7・8・9・21・24などである。この事実と先のピットの法量、平面形の差異の関係で言えば、比較的大きく方形に近いピットが7～8世紀代、円形で径が30cm前後の例が中世という一般的傾向が指摘されよう。

これらのピットは柱痕を残すものが多く、またピット18のように瓦・礫を



第5図 東円寺跡

SD01・02断面図

根石として詰め込んだ例も認められることから建物ないし棚列等の構造物の存在を示すものと考えられるが、調査面積の制約もあって明確に復原することはできない。

唯一、ピット26・6・27・7が柱間、柱筋が揃い、更に西側の

ピットも含めて建物に復原できる可能性がある。ただし先述したピット出土の遺物を重視すれば、ピット 26・27 が 7~8 世紀、7 が中世と時期が合致しないことから、若干の疑問も残る。

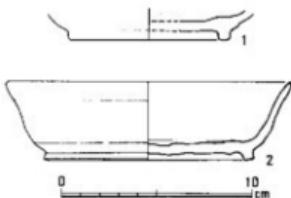
ピットからの出土遺物のうち図示し得るものは少ない。(2)はピット 25 出土の須恵器杯身である。小さめの高台がつき、やや外彎気味に開く口縁部をもつ。淡青灰色を呈し、胎土は密である。(4)はピット 26 出土の口縁端部を下方へ屈曲させた須恵器杯蓋である。灰白色を呈し、胎土は密である。また、(3)はピット 19 から出土した須恵器で杯身かと思われる。その他小片であるが、ピット 7 からは比較的しっかりした断片三角形の高台をもつ瓦器碗が出土している。

溝は大小 4 条が検出されており、いずれも基本的には現在の水田地割と合致する方向を示す。SD 01 は第 1 トレンチに平行、すなわち北西-南東方向に走る溝である。北西側では 1.7 m 以上の巾をもつが、南東部では巾 0.4 m 程に狭くなり、トレンチ内で終っている。深さも南東部では 5~10 cm であるが、北西部では段状をもって深くなり約 30 cm を測る。溝内の堆積土は基本的にやや汚れた黄褐色シルトであるが、北西側の深い部分にのみ淡灰色砂質土の薄層がレンズ状に堆積している。

遺物は須恵器、土師器、瓦器、青磁、瓦等が出土しているが、いずれも細片で量的にも 20 数点と少ない。須恵器は 7~8 世紀代に遡るものと、中世の摺鉢が認められ、土師器では中世の羽釜(9)、瓦器では断面三角形の高台をもつ碗等が含まれる。その他鉄釘(10)も出土している。

SD 02 は第 1 トレンチ内をやや彎曲気味に北西-南東方向に走る溝である。SD 01 と一部重複しており、SD 02 の方が新しい。巾 0.8~1.0 cm、深さ 10~20 cm を測り、総じて溝の北西側が深い。

溝内の堆積土は SD 01 と同じく最下層に薄い淡灰色砂質土の堆積が認められ、その上位に淡灰黄色シルトが溝を埋めている。溝内からの出土遺物は須恵器、土師器、瓦器の小片数点のみである。溝の時期については中世と推定され



第 6 図 東円寺跡遺物実測図

るが、それ以上の細かな年代決定は困難である。(1)はSD02出土の須恵器片である。低い直立する高台をもち杯身ないしは壺の底部と推定される。青灰色を呈し、胎土は密で黒色粒の吹き出しが認められる。

SD03は第2トレント南西部で検出した溝であるが、調査区ではごく一部を検出したのみであり詳細は不明である。またSD04は巾20cm、深さ10cmのSD01と直交する小溝である。耕作に開わる溝と推定される。

なおSD03・04とも遺物の出土は認められなかったが、堆積土はSD01・02に類似しており中世の遺構である可能性が高い。

4 小 結

東円寺跡の南西半部は比較的平坦な段丘面が占めており、調査前の段階から集落の存在は充分に予想されていた。調査の結果、奈良時代と中世のピットが検出された。調査面積の制約から建物としては確認できなかったものの、当該地がそれぞれの時期に集落の一画を占めていたことは間違いない。

ピット以外では4条の溝が検出された。出土遺物が少なく厳密な時期の限定はできなかったが、ピットとの重複関係や埋土の相違から溝が新しいものと考えられる。性格については確定できないものの、現在の土地区画と共に通する方向性をもつことから水田の用排水路の可能性が強い。これが妥当とすれば当該地では中世のうちに居住地から耕地への土地利用の変化がなされたものと考えられる。なお東円寺にかかる遺構は今回の調査でも検出されなかった。寺に関するものは若干の瓦のみである。従来、小字名や瓦の散布状況から推定されているように今日の調査地点から南東方向の中央小学校付近に求めるのが妥当と思われる。

(松村)

註

- (1) 藤沢真依 「東円寺跡発掘調査概要報告書」I 大阪府教育委員会(1983)
- (2) 芝野圭之助 「東円寺跡発掘調査概要報告書」II 大阪府教育委員会(1984)
- (3) 註(2)文献に出土遺物の概要が記載されている。
- (4) 周辺の小字名については註(2)文献に記載されている。

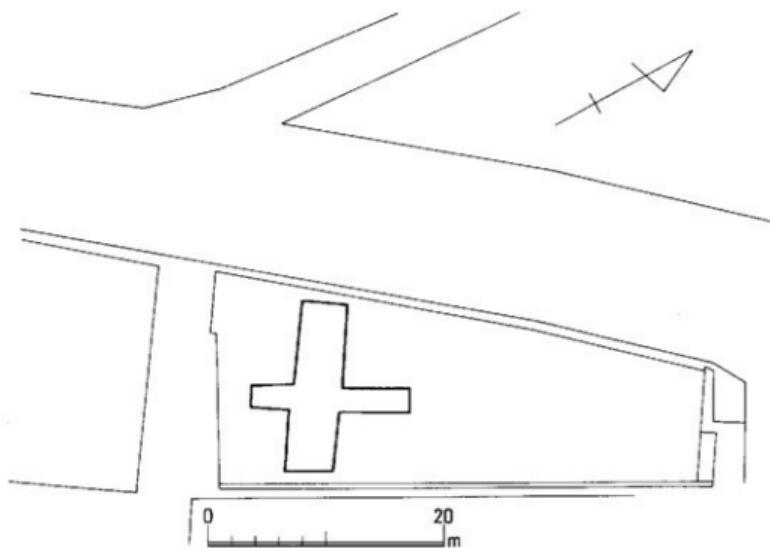
第2節 降井家屋敷跡85-1区の調査

本調査区は降井家旧屋敷地の北隅にあたる。住宅建築に先立つ事前調査である。

降井家は中世後半期に熊取荘及び周辺の村落を支配していた豪族層であり、今回の調査区はその屋敷地の一角である。江戸時代初期の特色を有する書院は、昭和27年に「降井家書院」として重要文化財に指定され現存している。「中家住宅」と共に中・近世屋敷



第7図 降井家屋敷跡調査区位置図



第8図 降井家屋敷跡トレンチ配置図

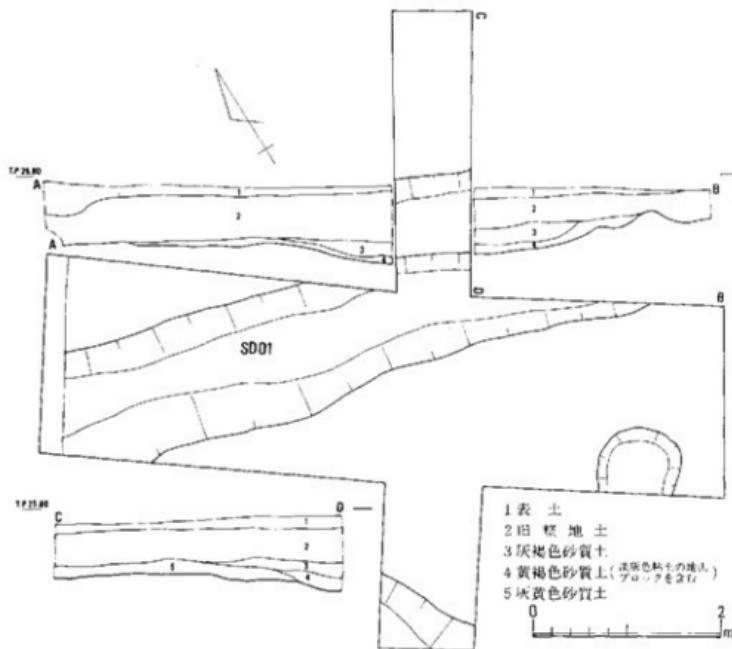
地を考える上で重要である。

層序は上層より第1層表土、第2層旧整地土、第3層灰褐色砂質土、第4層黄褐色粘質土、第5層灰黄色粘質土の順である。しかし、SD 01より南側は地山が高く表土直下で地山が露出する。北側に住吉川が流れており、旧地形は住吉川に向けて傾斜し下がっているようである。

1 遺構（第9図、図版第4）

先述した傾斜変換点で地山をカットし、比高差を0.5m程設け、さらに1.0m深さ0.2m程の溝（SD 01）をめぐらしている。この溝は排水施設であると共に屋敷地を区画する溝としての性格も有していたのではないだろうか。

トレント南端にみえる土坑及び南北隅の落ち込みは現代の擾乱である。



第9図 降井家屋敷跡平面図・断面図

2 遺物(第10・11図、表2、図版第5~7)

遺物の大半は旧整地土内からのもので、コンテナ4箱程の遺物が出土した。いずれも近世の陶器片・瓦片である。

唐津焼

碗(12・13・15・21) 12・15は縦釉で、体部から口縁部にかけては直線的にたちあがるが、口縁端部はやや外反する。13は天目で内面と外面腰部に鉄釉を施す。口縁端部は「く」の字状に外反する。21は唐津系刷目碗である。

皿(1・2・3・5・6・8) 内面は縦釉、外面は腰部まで施釉する。見込みには胎土目痕がみられる。1は高台の退化がみられ、1・6には高台に糸切痕がみられる。2は口縁部を折り返す折り皿である。5は鉄絵を施す。

鉢(24) 高台部分のみ一点出土。内外面共に鉄釉を施す。高台は断面四角形をなす。

伊万里焼

碗(14・16・17) 14は外面に菊花文を配す。呉須の色は淡い。16・17は外面に草花文を配す。いわゆる「くらわんか手」であり、呉須の発色も悪く、14に比べると後出のものであろう。

皿(7・9・11・18) 9は輪花の皿で、口鋒を施す。11は内面に雪輪草花文、見込みに草花文を配す。灰色の釉を施す。18は内面の菊唐草文を配す。白っぽい釉を内外面共施す。また、7は蛇の目状に釉をはぎとる。

その他

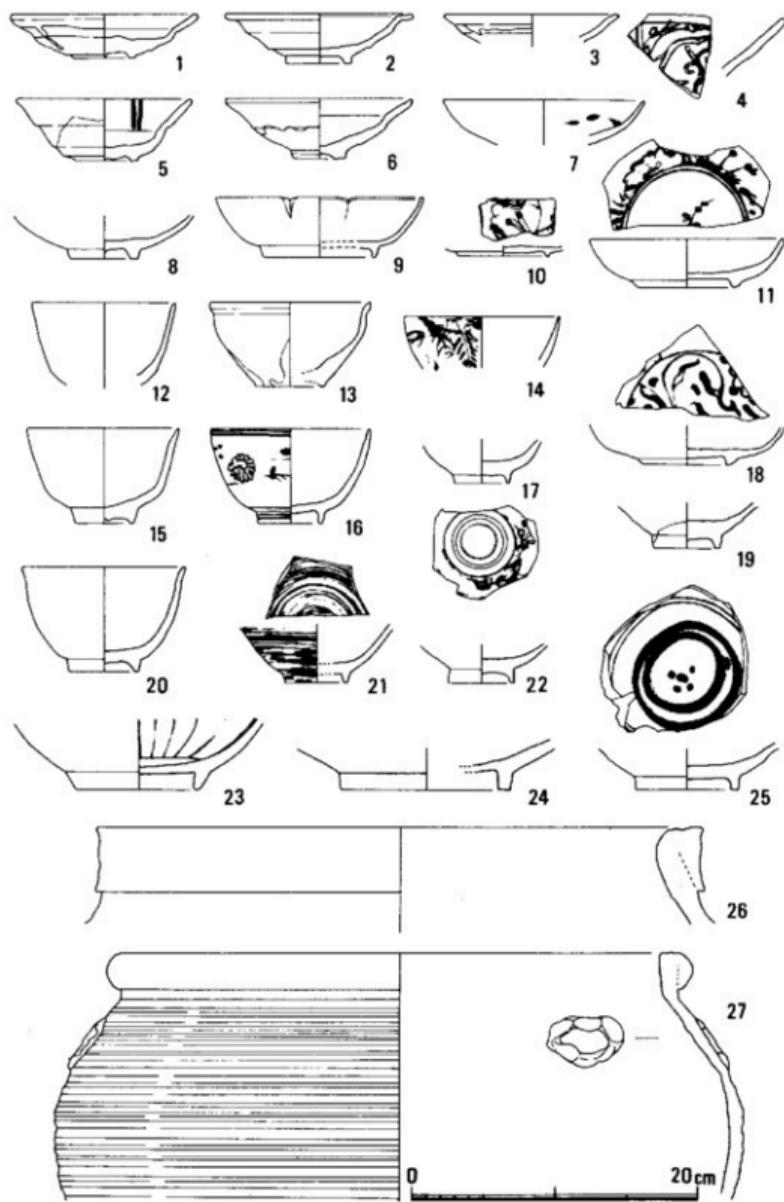
碗(20・22) 20・22は京焼風伊万里碗である。20・22共に黄灰褐色の釉を内外面に施す。胎土はさくい感を呈する。

皿(10) 中国製青花の皿である。高台部分のみ出土で、高台は薄く鋭い。

盤(4) 10とともに中国製のもので青花の盤である。10とともに明代のものであろう。

鉢(25) 潤戸の鉢である。底部のみ出土で、見込みに五花卉を配し、蛇の目状に釉をはぎとる。白っぽい釉を施す。18世紀後半のものと考えられる。

甕(26・27) 26は常滑、27は備前の甕である。26はN字状に口縁を折り返している。



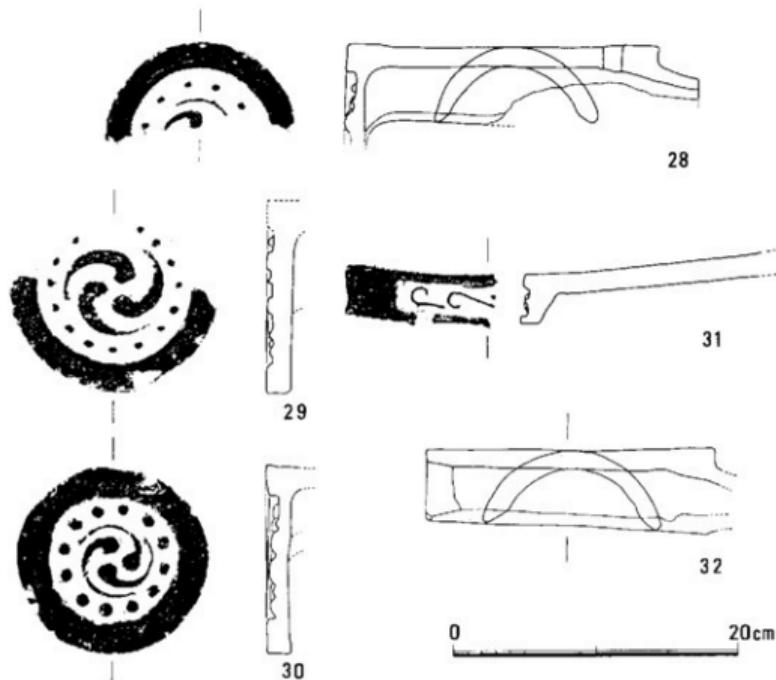
第10図 降井家屋敷跡 出土遺物(1)

瓦(28・29・30・31・32)

28～30は巴文軒丸瓦である。三点とも左廻りの巴文で、頭部は大きく丸くなり尾部も短かい。28・29は30に比べ珠文帯は小さく若干古相を呈する。29は均正唐草文である。いずれも江戸時代の所産であるが、詳しい時期はわからない。

以上、本調査区の出土遺物を概観したが、遺物の大半は16世紀後半の時期が与えられるようだ。一部、11、14、17、21、26、27は18世紀後半まで下るようである。

(森屋)



第11図 降井家屋敷跡 出土遺物(2)

第2表 降井家屋敷跡85.1区 遺物觀察表

：法量()は現在法量

測定番号	器種	法量(cm)	色調	胎	焼成	形態・技法の特徴	備考
1	唐津燒皿	口 径12.8 器 高 3.2 高台径 4.3 高台高 0.6	釉灰白色 (7.5Y8/1) 露胎部 橙色 (5YR6/6)	密 (最大1mmの白色 砂粒を含む)	良好堅密	高台内から高台端はカンナ削り。 高台に希切痕。 内面は延胎。外表面は腰部まで施釉。	見込み に胎上口 底4ヶ所
2	唐津燒皿	口 径12.9 器 高 3.6 高台径 4.0 高台高 0.6	釉明オリーブ灰白色 (5G Y7/1) 露胎部 に青・赤褐色 (5Y R5/4)	密 (最大1mmの白色 砂粒を含む)	良好堅密	高台内から高台端はカンナ削り。 内面は延胎。外表面は腰部まで施釉。	見込み に胎上口 底4ヶ所
3	唐津燒皿	口 径12.2 器 高 2.0	釉灰白色 (2.5G Y8/1) 露胎部 灰白色 (5Y8/1)	密 (1mm未満の白、 黒褐色砂粒を含む)	良好堅密	内面は延胎。外表面は口縁部のみ施釉。	
4	青花盤	器高 (4.3)	釉明緑灰色 (7.5G Y8/1) 外縁淡藍色	緻密	良好堅密	総 輪	
5	唐津燒皿	口 径12.2 器 高 4.4 高台径 3.8 高台高 0.6	釉に青い黄褐色 (10Y R6/3) 露胎部 に青い褐色 (5Y R7/3)	密 (最大1mmの白色 砂粒を含む)	良好堅密	高台内から高台端はカンナ削り。 内面は延胎。外表面が施釉されている。 外面は腰部まで施釉。	見込み に胎上口 底4ヶ所
6	唐津燒皿	口 径12.8 器 高 4.2 高台径 3.8 高台高 0.6	釉灰白色 (10Y7/1) 露胎部 に青い黄褐色 (10Y R7/4)	密 (1mm未満の白、 褐色の砂粒を含む)	良好堅密	高台内から高台端はカンナ削り。 内面は延胎。外表面は腰部まで施釉。	見込み に胎上口 底4ヶ所
7	伊万里燒皿	口 径14.0 器高 (3.1)	釉灰黄色 (2.5Y7/2)	密	良好堅密	総 輪	
8	唐津燒皿	器高 (3.6) 高台径 4.4 高台高 0.4	釉明緑灰色 (10G Y8/1) 露胎部 灰白色 (7.5Y8/1)	緻密	良好堅密	内面は延胎 外面は腰部まで施釉。	
9	伊万里燒皿	口 径14.4 器 高 4.2 高台径 7.8 高台高 0.8	釉乳白色	緻密	良好堅密	総 輪 口縁を施す。 輪 花	
10	青花盤	器高 (0.8) 高台径 6.2 高台高 0.6	釉 淡明青灰色 外縁 淡藍色	緻密	良好堅密	総 輪	雄鶏が付着。
11	伊万里燒皿	口 径13.4 器 高 3.4 高台径 6.6 高台高 0.5	釉 オリーブ灰白色 (2.5G Y7/1) 外縁 淡藍色	緻密 (最大1mmの黑色 砂粒を含む)	良好堅密	総 輪 青輪草花文	
12	唐津燒皿	口 径10.0 器高 (5.8)	釉 灰白色 (7.5Y7/2)	密 (最大1mmの白色 砂粒、黒色粒を含む)	良好堅密	内面は延胎。 外表面腰部まで施釉。	
13	唐津燒皿	口 径11.0 器 高 6.0 高台径 4.8	黑色 (2.5Y2/1)	密 (1mm未満の黑色 砂粒を含む)	良好堅密	内面と外表面腰部まで鉄錆が施されている。 大日型	

番号	器種	法杖(cm)	色調	釉土	焼成	形態の特徴		備考
						良好堅密	内面は細粒 菊花文	
14	伊万里燒瓶	径10.6 高(6.8) 高台径 4.1 高台高 1.1	釉 白色 (10Y8/1) 外須 青灰色 (5B5/1)	緻 密 (最大1mmの白色 砂粒を含む)				
15	唐津燒瓶	径11.0 高 6.8 高台径 4.1 高台高 0.9	釉 灰白色 (10Y7/2) 外須 淡黄色	緻 密 (最大1mmの黑色 砂粒を含む)		良好堅密	内面は細粒 外面は高台内のみ露胎	
16	伊万里燒瓶	器高(3.2) 高台径 3.9 高台高 0.7	釉 灰白色 (5G Y8/1) 外須 淡灰色	緻 密 (最大1mmの黑色 砂粒を含む)		良好堅密	緻粒 (蓋付は露胎) 菊花文	
17	伊万里燒瓶	器高(2.8) 高台径 6.0 高台高 0.5	釉 青味白色 外須 にほい藍色 淡蓝色	緻 密		良好堅密	緻粒 (蓋付は露胎) 菊花文	
18	伊万里燒瓶	器高 (3.3) 高台径 4.6 高台高 1.0	釉 青味白色 外須 淡蓝色	緻 密		良好堅密	緻粒 (蓋付は露胎) 菊花文	
19	伊万里燒瓶	径11.4 器高 (7.5) 高台径 4.9 高台高 0.9	釉 乳白色 露胎部 乳白色	密		良好堅密	内面は緻粒 外面は腰部まで施釉	見込みに 蛇ノ目は ぎ
20	京焼風 伊万里碗	器高 (4.0) 高台径 4.3 高台高 7.5	釉 淡黄色 (5Y8/3)	密		良好	緻粒 (蓋付は露胎)	
21	唐津燒瓶	器高 (2.8) 高台径 4.6 高台高 1.0	釉 にほい褐色 (7.5Y R6/3)	密 (最大1mmの白色 砂粒を含む)		良好	緻粒 刷毛目	
22	京焼風 伊万里碗	器高 (5.1) 高台径 8.2 高台高 1.3	釉 淡黄色 (5Y8/3)	密		良好	緻粒 (蓋付は露胎)	
23	伊万里燒瓶	器高 (5.1) 高台径 8.2 高台高 1.3	釉 青味白色 外須 淡黄色	緻 密		良好堅密	緻粒	
24	唐津燒杯	器高 (3.7) 高台径11.8 高台高 1.2	釉 黑褐色 (7.5Y R4/2)	密 (最大1mmの白色 砂粒を含む)		良好堅密	緻粒	
25	瀬戸燒杯	器高 (3.3) 高台径 7.1 高台高 0.9	釉 青味白色 外須 にほい蓝色	緻 密		良好堅密	緻粒	見込みに 蛇ノ目は ぎ
26	常滑燒窯	径41.6 器高 (7.0)	外面 灰赤色(10R4/2) 内面 暗赤色(10R4/1)	密 (5mmまでの白色 砂粒、赤褐色砂 粒を多量に含む)		良好堅密	ナゲ調整	
27	備前燒窯	径38.6 器高 (18.7)	外面 赤褐色(10R4/3) 内面 褐灰色 (7.5Y R5/1)	密 (2mm前後、最大 4mmの白色砂粒 を含む)		良好堅密	回転ナゲ調整	

第4章 まとめ

本書では東円寺跡と降井家屋敷跡のそれぞれの調査の概要について報告した。いずれも限られた面積の調査であったが、遺跡の実態を知る上で貴重な資料が得られている。今後の課題も含めて簡単にまとめておきたい。

東円寺跡の調査は、遺跡の中心に近いと推定される段丘面が対象地であった。出土遺物が少なく各遺構の厳密な時期決定に問題を残したもの、7・8世紀と中世のピットが検出され、それぞれの時期に当該地が居住地とされていたことが判明した。特に7・8世紀の集落に関わる遺構は、断片的資料にせよ東円寺跡においては始めての検出例である。今後集落規模の追求と、開発の内容、すなわち対象が段丘面そのものか、あるいは埋積谷や開析谷等を利用する段階に留まっていたのか等々が課題となろう。

中世の建物は国道170号線敷の調査でも検出されており、13世紀中頃から後半の時期とされている。今回検出したピットは出土遺物からこれと併行するかやや先行する時期の遺構と推定される。散在する建物群とこれをとりまく水田や畠が当該期の周辺の景観をなしていたと推定される。また中世後期には集落の廃絶と全面的な耕地化といった状態が想定される。この点については集落の集村化や、後述する降井家や中家などの土豪屋敷の成立と密接に関連するものと考えられる。(註)なお東円寺に関わる遺構は今回の調査でも確認せず、実態の解明は今後に残されている。

降井家屋敷跡における発掘調査は今回が初めてであった。屋敷地については天保6年(1835)作製の屋敷図が残されているが、調査地点はその北隅に該当する地点であり、調査では外郭の構造を明らかにすることができた。出土遺物からこの遺構が近世初頭まで遡ることは確実であり、今後調査が進めば土豪屋敷の成立時期や構造をより具体的に知ることができるとと思われる。なお降井家から東へ約500mの位置にも、かつて広大な屋敷を構えていた中家が存在するが、両家はそれぞれ大久保と五門の集落に位置しており、屋敷地の成立と村の成立の関連なども興味深い問題である。

以上思いつくままに問題点を記したが、熊取町における埋蔵文化財の調査は

いまだ緒についたばかりであり、豊かな歴史が土深く眠っているものと思われる。今後関西新空港計画の具体化に伴い更に開発の進行が予想されるが、文化財の調査と保存について充分な配慮を関係各位にお願いしておわりとしたい。

最後になったが、調査の実施と本書の作製にあたり下記の人々の参加があつた。明記して感謝の意を表する。
（松村）

出合明、土井幸一郎、松井明信、東彰宏、勢口俊彦、藤田道子、森田雅美

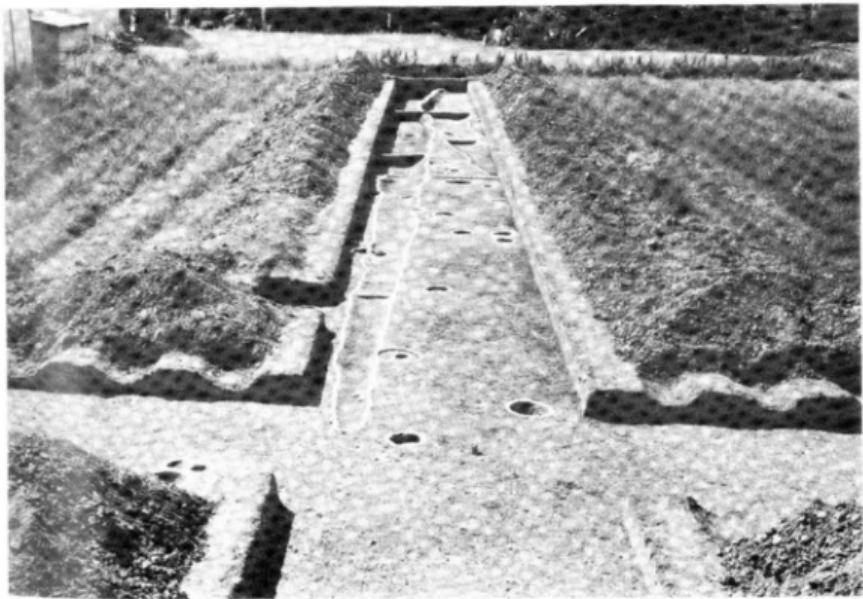
（註）広瀬和雄氏は14世紀における集落の集村化の可能性と、その契機に領主層の権力的介入を想定している。

広瀬和雄「中世への胎動」『日本考古学』6 岩波書店（1986）

図 版



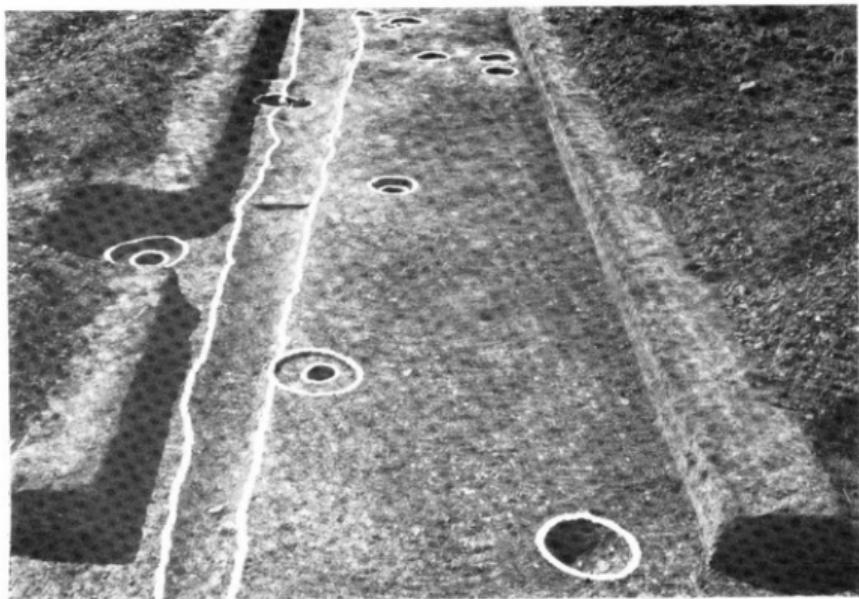
調査地遠景（北東から）



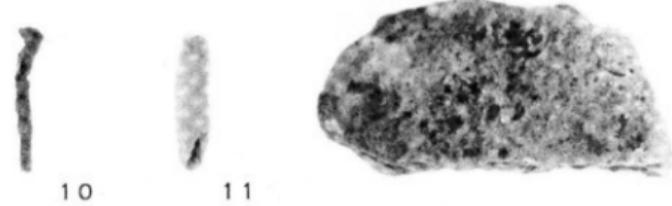
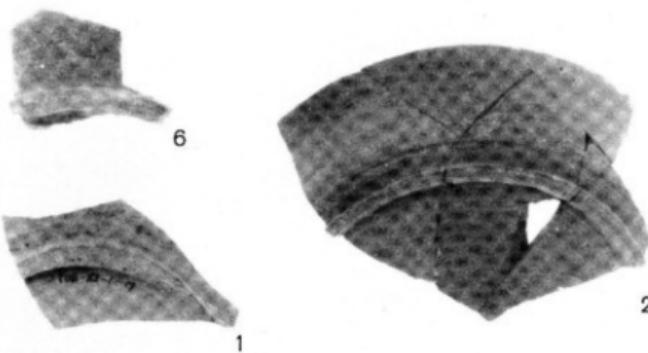
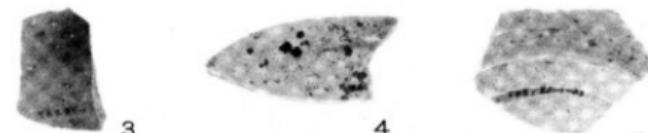
第1トレニチ（南東から）



第1トレンチ（北西から）

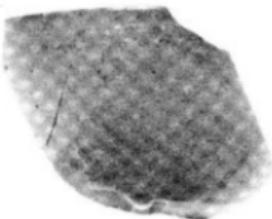


第1トレンチピット群（南東から）

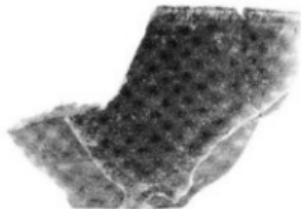




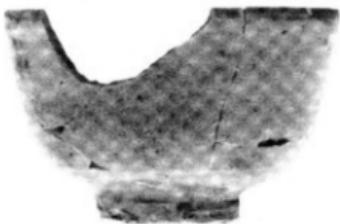
図版第五
降井家屋敷跡
遺物



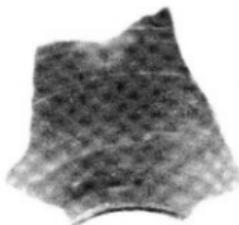
12



13



15



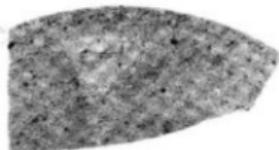
21



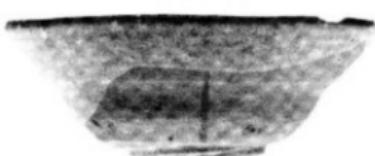
1



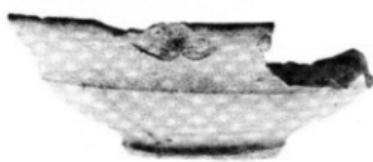
2



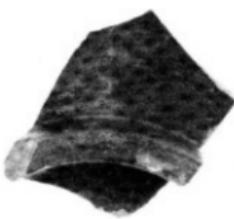
3



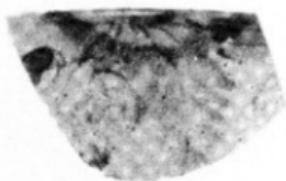
5



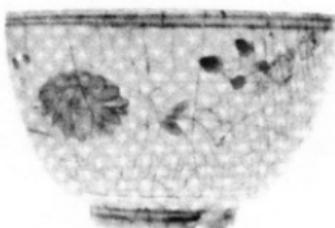
6



24



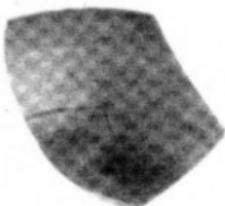
14



16



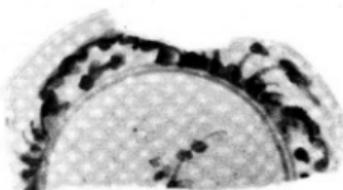
17



7



9



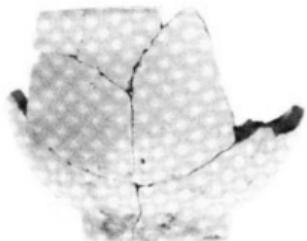
11



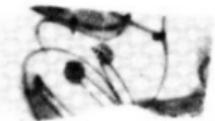
18



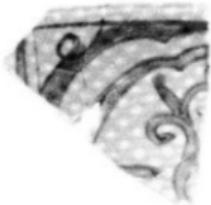
11



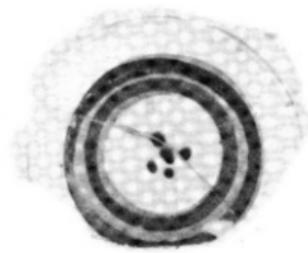
20



10



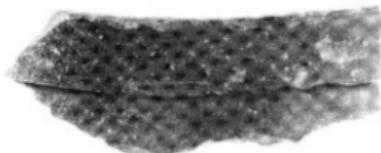
4



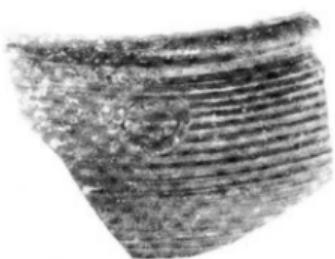
25



25



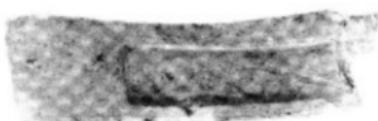
26



27



28



31



29